

あらかじめ自らの限界を決めてしまう（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2016/12/20 6:30 | 日本経済新聞 電子版

今年は、少しは海外出張を減らそうと思っていたのだが、今年も終わりに近づいて、振り返ってみると、20回以上こなしてしまった。数年前までは飛行機での移動時間は、いい休息だと思っていたのだが、この頃は、すぐには時差も解消せず、疲労感が残るようになった。11月の中旬は、たまたま海外出張を取りやめたら、急性胆のう炎になって、即刻、摘出手術となった。海外にいたとしてもそれほど重大事ではないだろうが、やはり日本に居て助かったと、運がいいのだと吹聴している。執刀医の先生、親切で優しい看護師さんに介護されて、よかったとしか言いようがない。手術後、3日目には点滴を外してもらい、病院の近所にある喫茶店に行き、たばこを吸うなどという不当な振る舞いも、海外の病院では許されるはずもない。

■音楽こそ科学の基盤

秋は時間のある限り、休日をすべて利用して演奏会に出かけた。退院後も、マリス・ヤンソンスの指揮、バイエルン放響でマーラーの交響曲第9番を聴いた。その4楽章に引き込まれているうちに、私の葬儀の時は、やっぱりこれにしようかななどと、余計なことを考えた。死んでしまった当人が、葬送曲に頭を巡らすこともないのだが、入院や手術という経験のせいか、気分によって考えが変わるものである。この第4楽章を聴くたびに、死する人間という存在を愛撫するような音楽だと感じていた。静寂から無に帰する旋律とハーモニーを比類ない表現で演奏したことで、妙な思いが湧いてしまったのかもしれない。

10年以上も前の話だが、リッカルド・ムーティさんに「東京・春・音楽祭」で、ヴェルディの「レクイエム」を演奏していただいた後、食事をしていた時に、「ムーティさんのレクイエムには、最後になって明るさが漂ってくるような演奏ですね」と言ったら、「死は悲しいけれど、暗く悲しいだけでは、何の報いもなくなってしまふ。死者を送るには、最後のところで明るさを予兆させるものがなくてはならない」、そんなことをおっしゃっていた。私も図にのって、わが国の西方浄土の話などをした記憶がある。年を経てみれば、赤面するようなお恥ずかしい話である。



クリスマスの照明が点り、混雑する丸の内仲通り（筆者撮影）

「士曰（いわ）く、詩に興り、礼に立ち、楽になる」（「詩経」を学ぶことで精神や感情を高揚させ、礼法を学ぶことで、自立し、音楽によって教養を完成させる）。孔子ばかりでなく、古代ギリシャでも、音楽こそが数学や物理学の基盤となるアートとされているのに、日本で音楽はそこまでの評価をされていないようだ。欧米の演奏家と話が合うのは、彼らが数学から法学までさまざまな学問を経ており、話題が広く、話が尽きないからだ。音楽一筋が悪いわけではないが、私のように、音楽は道楽の域を出ないまま、音楽祭を主宰している人間にしてみると、本来、音楽は閉ざされた小さな世界ではないのだと、思うことが多い。

■「戦争によってしか奪えない」

長年インターネットの仕事をしていながら、私には書物への執着があり、液晶画面で読むのは、ニュースぐらいである。海外に行く時は、衣服の容量をできる限りコンパクトにして、そのスペースに本を積み込んでいく。長々しい歴史ものを手にすることが多く、大体が数百ページ以上の著作で、荷物としては最悪である。秋ごろ読んでいたのは、上下巻で800ページを超える「クレムリン」（キャサリン・メリデール著）と、500ページを超える「ハプスブルグ君主国1765-1918」（ロビン・オーキー著）という書籍である。殺りくと粛清を繰り返したスターリンの専制政治は、ロシアの800年の歴史を象徴している——そんな感想すらもつ。ツァーリ（専制君主）と農奴、宗教の国だったロシアは、なによりも強い指導者を求める国である。「ロシアの歴史に暴虐の刻印を残した責任は、為政者ではなく民衆にあるのではないか」。筆者は、大公国から王朝支配、そして共産党支配と姿を変えるが、ロシアにおいて正統性を持つ者はなく、「クレムリンの歴史は生き残りをかけた闘争の物語である」とくくっている。プーチン大統領にしても、ロシアの歴史に沿って、権力闘争に生き残った指導者なのである。過酷な統治の歴史は、ロシアの底に流れる本質でもある。

昔から、「あらゆる領土は、戦争によってしか奪えないものであり、奪い返すのも戦争という手段しかない」といわれている。ロシアという国、領土問題の過去のすべてを知悉（ちしつ）して、なお安倍首相が日ロ会談を持った意味は大きいのだろうが、北方領土をロシアが決して手放さないという前提を変えずに、なんらかの新しい仕組みをつくって平和条約まで進める

ものだろうか。中国の南沙諸島の戦略も同じようなもので、国際司法裁判所の判断がどうであれ、中国が領土を拡張することはあっても、縮小することは考えにくい。あるとすれば、軍事的な均衡が破れる時だ。米国との同盟を基本とする日本は、中国、ロシアの隣国である。領土問題が平和的に解決したことは歴史的にもないという事実と向き合うのが現実の政治でもある。

■クラクフの演奏家の提案

ウィーン国立歌劇場の日本公演の折、「ワルキューレ」の上演でヴォータンを歌ったコニエチュニーさんと食事をした。コニエチュニーさんは、大のすし好きで、日本にいた間は、毎夕、寿司を食べて飽きない。いつも通り、すし屋で飲んで食べ続けているうちに、「鈴木さん、私の生まれたポーランドのクラクフにもいいオーケストラがある。ウィーン・フィルにもクラクフの出身者がいる。ペンデレツキをはじめとするポーランドの作曲家に光を当てた演奏会を春の音楽祭でできませんか」と、そんな話になった。クラクフは17世紀初頭、ワルシャワに移るまで、ポーランド王国の首都であり、世界遺産となった都市である。オーストリア帝国領を経て、ヒトラーの時代には、ユダヤ人が多いことからゲットーもできた。ペンデレツキは、「広島犠牲者にささげる哀歌」という弦楽合奏の作品で、日本でも知られている作曲家である。世界から、クラクフを愛するポーランド演奏家が集まって、どんな演奏をするのだろうか。過酷な歴史を持つポーランド人の、国や故郷に対する強い愛着を、日本でどう表現するのだろうか。すぐには決められないので、話を続けましようとなった。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

退院後、すぐに国内出張があった。最終の東京行きの新幹線で「論語」を読んでいたら、こんな言葉に触れた。「冉求（ぜんきゅう）曰く、子の道を説（よろこ）ばざるに非ず。力足らざるなり。子曰く、力足らざる者は、中道にして廃す。いま、汝は画（かぎ）れり」。孔子の教えを素晴らしいと思うけれど、自分には実行する力がないという冉求に対し、孔子は、力が足りない者は、途中で挫折するのだが、お前はあらかじめ自分で自分の限界を決めているのだ、と答える。

IIJは昔から、分をわきまえず、自らの限界をわきまえず、性懲りもなく挫折を繰り返してきたのだが、最近は挫折する前に、自分の限界を決めてしまう傾向がある。一概に悪いことだとは言えないけれど、楽に生きようとしているのなら、心配なのである。IT（情報技術）の世界はまだまだ、自らの限界をあらかじめ決めてしまえるほど、スケールの小さい世界ではない。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

読者からのコメント

ひの正平さん、60歳代男性

目標は、いつも大きく掲げ、前進あるのみとゆうことですか。領土問題は、勝者のみのものではない。北方領土も、ロシアのいいとこどりだと思いますよ！！ここは半々で、手を打っては如何なものでしょうか？ロシアの歌でも合唱して、解決策を探っては、如何でしょうか。

40歳代男性

「IIJは昔から、分をわきまえず、自らの限界をわきまえず、性懲りもなく挫折を繰り返してきたのだが」のIIJは鈴木さんに読み替えるべきですかね。体調はご留意された方が良いでしょうが、これからも限界をわきまえず、頑張ってください。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。